

愛と祈り

われわれはもともと一つであった。
 それ故、
 他人の幸せを自分の幸せのように感じ、
 人の苦しみを減じるために何かをしたいと思うのだ。
 祈りや瞑想は、深いレベルで生命が
 一つであったことに気づく体験を与えてくれるものである。

青山圭秀
 作家

人は愛する対象に近づく

『愛と祈り』という難しいテーマを与えられ、
 少しく考え込んでしまった。

「祈り」も「愛」も、われわれがより高い存在、
 崇高な存在に向けて想い、語り、行なう、さま
 ざまな心理・生理作用を含んでいる。祈りは感
 謝であったり、讃美であったり、あるいは願
 いであったりもするだろう。愛もさまざまな局面
 で想われ、語られ、行なわれるだろう。その両
 方と、そしてそれらの関係性を分析し、感じ取
 ることは、人間の理性や感性をほとんど超えて
 いる。

それでもあえて『愛と祈り』について語ると
 すれば、私には、そこにたった一つ、共通の原
 理が横たわっているように思える。それは、
 『人(生命)は、その想い(愛)の対象に近づく』
 という、単純な原理である。

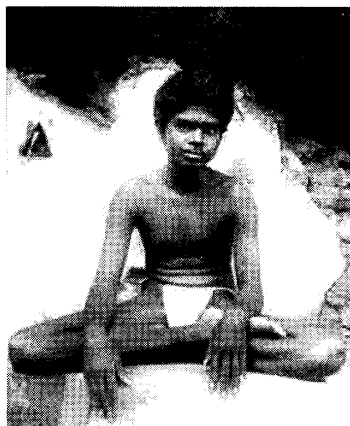
今、ある人が真に誰かを愛しているとすれば、
 彼はその対象に近づいていかざるを得ない。一
 例を挙げれば、愛する対象がイエスである場合、
 彼はいずれにしてもイエスに近づいていく。イ
 エスを想い、イエスと語り、イエスに学び、イ
 エスに倣い、イエスを生きる……そういう人に、

たとえば教会に行くなど言っても、彼は隠れて
 神父や牧師に会うだろう。たとえ軟禁しても、
 彼は隠れて聖書を読むだろう。聖書や聖典をす
 べて取り去り、焼き払ったとしても、彼はイエ
 スを想うことはやめはしない。結果、彼はイエ
 スに近づいていく。世の中には理想的な人格が
 さまざまあり、それぞれがこの上なく立派なの
 であろうが、彼にとってはイエスこそが理想な
 のだ。幸せの実現なのだ。

なぜ人は、愛する対象に近づいていかざるを
 得ないのか。これについて、明確な説明をつけ
 るのは難しい。人間の理性や感性で考えたり感
 じたりすることはあまりに部分的かつ一時的な
 ので、なぜわれわれがこうした崇高な理想に惹
 かれ、近づいていくことができるのかも明確に
 は理解できない。しかし、太古の昔からイン
 ドに続いてきた哲学は、これをある程度説明し
 てみせる。その哲学を、ここではごく単純に
 「ヴェーダ」と呼ぼう。

わたしは、それ

ヴェーダを体現した人格の一人に、二十世紀
 を代表するインドの聖者ラマナ・マハリシがい
 る。少年の頃、特異な体験に打たれて家を出た
 彼は、列車を乗り継ぎ、何日も歩いて聖山アル



若き日のラマナ・マハリシ

ナーチャラに到達する。そこで、ほとんど忘我の瞑想状態に入っていくのである。

一人の少年が瞑想の姿勢で座り、ぴくりとも動かない。その様子を、周囲の子供たちはものを投げつけ、囃し立て、様子をうかがった。が、彼が動くことはなかった。

大人たちもまた、好奇の眼差しを向けた。が、少年はやはり座ったまま、食事をとろうともしない。とうとう見かねた寺院の管理人は少年に食べ物と渡そうとしたが、彼は食べようとしなかったので、口から押し込み、生命を保ったといわれる。

そのような彼の様子を見ていたのは人間だけではない。蟻も、蚊も、ムカデも関心を示した。それでも彼は不動の姿勢で瞑想を続けたので、蟻や蚊、ムカデに噛まれた体は血膿にまみれていたという。

じきに親戚が捜し当て、連れ戻そうとしたが、無駄だった。母親がきて、怒り、泣き、わめき

などしたが、少年が沈黙を破ることはなかった。そうして十年、二十年が過ぎ、遂に彼が気づくときがやってきた。

『わたしは『それ』という真実に気づいたのだった。』

私はそれ、すなわち「実在」そのものであった。それを英知とか至福、または神と呼ぶこともできたであろうが、学問のない彼には「それ」としかいいようのない何かであった。これが、数十年の瞑想の末、ついに彼が気づいた、この世の真理のすべてであった。

真理の表現

これと同じことを、イエスもわれわれに気づかせようとした。イエス自身が「それ」、すなわち神であることと同時に、われわれもまたそうであることを。だから、イエスは最後の晩餐で言ったのだ。

『これからもう、わたしはあなた方をしもべとは呼ばない。あなた方を友と呼ぶ……』

【ヨハネによる福音書】十五・十四～十五）
神と一致した人格であったイエスにとつて、通常の人間は本来しもべか、それ以下であったに違いない。しかし彼は、自分だけではなく、われわれもまた神の子であり、神であることを

知っていた。なので彼は、弟子たちを「友」と呼んだのである。

イエスを愛する者は、結局、イエスによる真理の表現を愛しているのである。それは、イエスによる「神」の実現といってもよい。イエスの言葉に顕れた、イエスの行動に顕れた、イエスの肉体や風貌に顕れた、イエスにまつわる何もかもに顕れた真理や神の表現が、彼には好ましく思えてならない。

同じものを、仏陀も顕したのである。クリシュナも顕した。それは、まさに同じ神、同じ真理を顕したのである。イエスを好む者はイエスによる表現が好きなのである。仏陀を好む者は、仏陀による表現が好きだ。われわれもともと神の一つの表現であったのだが、まだその表現が稚拙だ。しかしそれを、イエスや仏陀がそのまま、完璧に表現してくれた。だからそれが、愛する者にとつては小気味よい。それを見たり、聞いたりするのが心地よい。本来、自分がそうしかった表現を、風貌のなかで、教えのなかで、ときには奇跡のなかでイエスや仏陀が表現しきってくれたので、彼は嬉しくてならない。そういう人は、いつも彼らのことを想うことになる。その想いには「祈り」があるであろう。たとえばイエスに語りかける言葉、問う言葉、願う気持ち、その一つひとつが祈りである。イ



ルルドの祈り



聖母マリア出現の洞窟

エスに倣おうとした行動すらも、祈りと呼んで差し支えない。イエスを愛する者にとつては、その想いも言葉も行ないも、すべてがイエスに向けた祈りである。

究極の瞑想を体験

かつて、聖母マリアの出現を題材にした小説を書いたことがあった。読者の皆さんと盛り上がり、フランスのルルドに巡礼に出かけた。十九世紀半ば、聖母マリアがご出現になり、泉が湧いて、その水を飲んだり浸かったりした人に数々の奇跡が起きていることは知っていたし、そういうこともあるだろうと信じてもいた。しかし実際に、旅に参加された皆さんのなかから奇跡的治癒に与る人が現れたとき、自分自身がそれらをよくは理解していなかったことがよく分かった。

ルルドに行けば、そこは祈りの坩堝である。人びとはそれぞれに讃美や感謝、願いを口にし、祈り続ける。そのなかから、まるで当たり前のように奇跡が起きるのであるが、それはわれわれの頭のなかで思ったり、考えたりしていることではない。現実には、肉体的に、物質のレベルで起こる。

ラマナ・マハリシの変容もそれに似ている。

それは、聖典を読んだり、考えたり、想像したりすることとは違う。何かが、リアルに変わるのだ。瞑想を続け、イエスと同じ境地にまで到達したとき、彼は究極の祈りの状態にあったであろう。同じように、瞑想をお教えた生徒さんでこの山と一緒に巡礼した方のなかには、たとえ一時的でも、このような究極の瞑想を体験する人が現れる。彼らが口を揃えて言うのは、それは何かもやもやしたものではなく、リアルで、生で、現実的な体験だということだ。その後の日常生活すらも変わっていくような。

こうして、ヴェーダがいうように、

『人は、その想う（愛する）対象に必ず近づく』

そして最終的には、

『愛する者と愛される対象、さらに愛そのものの間に区別がつかない』状態が訪れる。

われわれは、もともと一つであった

さて、ここたとえば、われわれが相対世界で落ちる普通の愛や愛情のことを考えてみよう。その対象は通常、不完全極まりない何かだ。あばたもえくぼとばかりに、われわれは不完全な誰かを好きになる。

もちろん、われわれの側もまた、それに劣らず不完全であることは言うを待たない。人を本

当に好きだと思っただけでも、その気持ちたるや些細な出来事でぶれることに気づくし、ときにはすっかり覆ってしまうこともある。いまだかつて、一つの人生の間中続いた恋などというのが、いかほどあったのだろうか。

ところが、両者ともにこれほど不完全な者の間にある「愛」ですら、その甘美なさまといつたらない。世界にこれ以上美しいものも、甘いものもないかのごとき感覚を、われわれの誰もが得ることになるのであるが、しかし一体、それはなぜなのか？

ヴェーダは言う。それはもともと、われわれのすべてが「それ」であり、すべてが一つであったからだ。そのような真実に気づくからこそ、人の愛も、恋も美しく、甘い。それ以上のものがないかのような感覚に、人は酔うのである。

そのような対象は、とりあえずわれわれにとつて一人しかない。しかしもし、近い人たち全員を同じように愛することができたら、われわれは少し進化した状態になったといつてよいだろう。もしそれが地域や社会全体となり、同胞の幸せに多大な貢献をして亡くなった人は、偉人と呼ばれることになる。その対象が人類の、そして生命の全体であったりするとき、彼は聖者とか、聖女と呼ばれるであろう。

われわれは、もともと一つであったにもか

わらず、そのことを忘れた。そうして、自己の小さな利益を追い求めるようになってしまった。イエスや仏陀、クリシュナのような人格は、そこからすっかり脱却した人たちであった。アウシュヴィッツで囚人の身代わりとなって死んでいったコルベ神父や、自らは信仰の闇に苦しみながらたくさんの方を救って亡くなったといったマザー・テレサのような人は、われわれとイエスの中間の地点にいる人なのかもしれない。われわれは、そのことがある程度理解できるからこそ、その理解の度合いに応じてイエスのような人びとを愛し、敬い、祈りを捧げる。こうした人びとに近づくことを幸せだと思ふ。そして、実際、少しずつ近づいていくのである。

進化への教材で満ちた相対世界

二〇一一年は、われわれ日本人にとって忘れることのできない年だった。多くの人が家を失い、家族を失い、自分自身の命を失った。

その様をみていて、たくさんの方がまた、次なる行動を起こした。

もし、一人ひとりが真に別々の存在なのであれば、われわれは特に、人の不幸と一緒に苦しむ必要はないのである。しかしどのようにしても、われわれは、人が苦しんでいれば、同じよ

うな苦しみを味わうことになる。他人の幸せを、自分のことのように幸せと感じる。そんなときわれわれは、もともとすべてが一つであったという真理を、少しでも体験している。人の苦しみ減らしたいと思っただけ何かをするとき、われわれは、もともと別々のものではなかったことを、やはり少しだけ実践していることになる。祈り、あるいは究極の祈りである瞑想をし、存在の深いレベルで生命が一つであったことにリアルに気づくとき、われわれはまた少し進化するようになる。

相対世界は、そうした教材に満ちている。その教材は、ときには苦く、哀しいものであるにしても、われわれが学ぶに相応しいものであるに違いない。

そうして、ヴェーダ聖典も、歴代の聖仙らも口を揃えて言うように、おそらく適切なことは、適切なとき、適切な人に、適切な形でやってくる。もしそうだとすれば、われわれは、今思っているほど絶望的な状況にいてのではないのかもしれないと、私は秘かに思うのである。

あやま・まさひで

現代科学を専門としながら東洋の伝承科学とその哲学的基礎を研究、瞑想の指導は一〇〇〇人を超えた。『最後の奇跡(幻冬舎文庫)』、『深い河を探る』(文藝春秋社)等、著書多数。理学博士・医学博士。

<http://www.art-sci.jp/aoyama>